

国文研ニュース

No.54 WINTER 2019



『かみよ物語絵巻貼付屏風』

目 次

● メッセージ

継承と蓄蔵 鈴木 俊幸 1

● 研究ノート

ホノルル美術館蔵『塵滴問答』について 齋藤真麻理 2

● エッセイ

一期一会 小林 一彦 4

● トピックス

第11回日本古典文学学術賞受賞者発表 5

第11回日本古典文学学術賞選考講評 田中 大士, 中嶋 隆, 入口 敦志 6

中世日本の写本文化をめぐる研究集会 海野 圭介 8

肥前島原松平文庫における合同古典籍研修会 入口 敦志 8

日本古典籍セミナー University of California, Berkeley 2018 柳瀬 千穂 9

公開研究会「古典籍画像に対する文字認識と内容解析への取り組み」 岩橋 清美 10

大学共同利用機関シンポジウム2018 入口 敦志 10

「福島県浜通りの歴史と文化の継承—『大字誌ふるさと請戸』という方法—」 荒木 仁朗 11

平成30年度古典の日講演会 糸 汐里 12

第42回国際日本文学研究集会 滝澤 みか 13

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況 14

継承と蓄蔵

鈴木 俊幸 (国文学研究資料館運営委員、中央大学文学部教授)

史も文も「ふみ」である。今でこそ別立ての学問となっているが、江戸時代までは、この国の歴史に関わる研究と古典に関わる研究との間に明確な一線は無かったものと思われる。ひとしく「くにつふみのまなび」の中に同居していたはずである。いまさらそこに立ち返ることは不可能だし意味もない。しかし、根っこで共有している部分はゆるぎなく今に受け継がれているものとする。いずれも、先人の残した「ふみ」、史料・典籍が無くては成立しない学問である。「ふみ」を正しく読み解き、そこから時代そのものに目を凝らす学問である。ここに関しては、昔も今も変わるまい。

史・文、二つの領域に等しく課せられてきた最大の役割は継承であると私は考える。それはまず学問の継承、先達の達成を次代につなげていくことである。それとともに、学問の拠って立つ基盤、すなわち典籍・史料そのものの継承がなくてはかなわない。「ふるきふみどもの世にたえてつたはらぬは万づよりもくちをしく歎かはしきわざ也」という宣長の言葉は、今もこの学問分野の共通の認識である。国文学研究資料館では、全国各地の機関や個人所蔵の古典籍を調査し、マイクロフィルムに収めて広く公開してきた。またさまざまな史料そのものの収集と整理を行い、史料群の所在情報を蓄積してきた。

そして今は「日本語の歴史的典籍データベース」構築事業のまっただ中である。世界中のどこでも居ながらにして原本の画像に接することが可能な状況が訪れようとしている。多大な労力を要する仕事であるが、一度これに載れば、止めどなくデータは拡散し、散逸はありえなくなる。是非とも強力で推進し、事業を成就していただきたい。応援は惜しまない。

さて、ここからがじつは本題。国文学研究資料館では、もっと史料と古典籍そのものを買ってほしい。これらの蓄蔵を誇る日本一の機関になってほしい。いまやどの大学図書館も、有料のデータベースや電子ジャーナルといった電子資料費に予算を食い潰されて、史料や古典籍そのものを収集する余裕はなく、収集の志も萎えてしまっている気配である。いまや国文学研究資料館が大きな頼りである。

典籍・資料の電子化による公開は、誰でも効率よく情報として消化できる万民共有の研究資源とそれらがなることを意味するわけであるが、それは消化すべき、消化できる情報にすぎないとも言える。いかに高精細な画面でリアルな再

現力を有した画像であろうとも、そこにいかに詳細な書誌データを加味したものであっても、将来的に手触りもヴァーチャルで伝えられるようになったところで、それはそのとおりであろう。

愛情は情報にはなく存在に向けられるのではないか。形があり質量をともなって存在しているものには、そしてそれを保有することには、情報のソースとなることは別の大きな意味がある。存在するものとして、公的なところに安定的に保有されていることの意味は重い。学問上の意義とは別のところに、おそらくそれ以上に、人々の心の奥深いところと関わって重要な意義がある。存在も継承する学問であってほしい。すでに、多くの貴重な史料や古典籍を所蔵していることは知っている。しかし、もっともっと蓄蔵して、未来にそれらを受け渡してほしいのである。

予算が無いのは百も承知。受け入れた史料・典籍を整理する人的・時間的余裕が無いというのも千も承知。しかし、それでも、国文学研究資料館には、ががつと現物資料を買い漁ってほしい。古書価格が暴騰して、個人コレクターが世をはかなむくらいのえげつない買い方をしてほしい。そして、人々、家々、時代時代の心の拠り所であった、その存在そのものを継承して、日本一の古典籍・史料の収蔵施設となってほしい。共有の愛すべき豊かな財産を永遠に守り伝えていってほしいのである。

無い袖は振れないというのであれば、ちゃっかり頂戴することを考えてほしい。代々蔵に溜め込んできた文書や古本の処分について、道具屋に片付けてもらった話などはしょっちゅう耳にするところである。あらゆる広報手段を使って(館長も大いに使って)大々的に呼び掛け、それらを全部引き取ろうというような企みがあってもよいのではないか。「また明治の教科書の山だよ」とかこつなかれ。今はありふれた古本でも、それがいつまでもありふれたものである保証はどこにもなく、また、かつてありふれていた状況をそのまま示す資料群として価値を発揮しないものでもない。整理する時間・人手、つまり整理のための予算が無いというのであれば、整理の大仕事を負債として未来に残してしまってもよいのではないか。今安価で古書市場に出回っているものでも、いつまであり続けているかわかったものではない。現にどんどん流失している危機感をひしひしと感じる。今が買い時、集め時、一刻の油断もならないものと私は思っている。

ホノルル美術館蔵『塵滴問答』について

齋藤 真麻理（国文学研究資料館教授）

ホノルル美術館（HoMA）のレイン・コレクションは優れた版本の蔵書として名高い。2017年2月、同館で日本古典籍セミナーが開催された際は稿者も講師として参加し（『国文研ニュース』No.47）、奈良絵本を含め、貴重な古典籍を拝見する機会に恵まれた。ささやかな謝意をこめて、今回はコレクションの基幹をなす版本から『塵滴問答』を紹介したい。

一、事物起源の書『塵滴問答』

『塵滴問答』は遠江今善光寺の茶屋を舞台とし、老僧と商人との問答によって事物の起源や仏教知識などを説く教訓書である。多様な諸本が伝存するが、写本系と版本系では内容が大きく異なる。とりわけ後者は事物起源に焦点が絞られ、説話的な言説への関心が高い。

最古本に長享3年（1489）奥書の智積院本があり（注）、内閣文庫本（天文22年・1553写）や京都大学谷村文庫本（天正13年・1585写）、龍門文庫本（室町末期写）等は各機関がデジタル画像を公開している。写本研究では陰陽道や中世談義所の学問との関連性、問答形式の問題等が俎上へのほり、本書の特質と意義が論じられてきた（阪口光太郎『『塵滴問答』と『神道雑々集』』『東洋大学大学院紀要』26、1990年2月。鈴木元『室町連環』2014年、勉誠出版。小助川元太『行誉編『壺囊鈔』の研究』2006年、三弥井書店ほか）。

他方、版本は古活字版をはじめ約20の版種を数え、本書が息長く読み継がれたことを伝えている。これらを書誌学的見地から網羅的かつ精緻に俯瞰した研究は、渡辺守邦「版本・ちんてき問答一翻刻と解題一」（『国文学研究資料館紀要』9、1983年3月）が唯一無二といえよう。そのご論に従って版種を一覧すると、①古活字版（7種類）②寛永無刊記本③寛永9年版④寛永10年版（寛文10年版の誤りか）

⑤寛永16年版⑥寛永無刊記中本⑦正保2年版⑧正保3年版⑨明暦2年版⑩明暦3年版⑪寛文4年版（絵入り）⑫寛文9年版（寛永の誤り）⑬寛文10年版（絵なし）⑭寛文年間版⑮宝暦7年版（⑯の元版か。所在不明）

⑯刊年不明 鱗形屋版（絵入り）⑰刊年不明 村田屋版（絵入り）⑱文政13年版（絵入り）⑲刊年不明 泉市版（絵入り）⑳刊年不明 文昌堂版（絵入り）となる。

渡辺氏は⑨明暦2年版の備考に「刊年を欠いて「松会開板」とのみする版があったというが未詳」と記された。昭和9年7月発行『雲泉莊山誌』別冊第四・家蔵松会板之書目には「99 ちんてき問答 松会開板 中本 一冊」と見え、柏崎順子『増補松会版書目』（日本書誌学大系96、青裳堂書店、2009年）も同様の記事を載せ、未見の由を記す。

HoMA本『塵滴問答』はこの未紹介本と思しく、冊末に「松会開板」とのみある（図）。中本1冊、縦19.0×横13.5cm。

題簽欠。内題「ちんてき問答」。版心「ちん（丁付）」。全27丁。毎半葉12～14行。各話の一つ書で改行して行頭に▲を記す場合が多いが、▲を付さずに追い込む箇所もある。和歌は一行書きと二行書が混在し、冒頭に▲を記す場合や、挿絵中に添える場合もある。挿絵は全23図、第2丁～第24丁のオモテ丁の下半分に配される。

これに近い伝本は⑯の鱗形屋本である（矢口丹波記念文庫蔵・<https://doi.org/10.20730/100118760>）。用字には小異があり、挿絵は酷似するものの、HoMA本の23図のうち、鱗形屋本は計7図（第3図、第8図、第11図、第12図、第18図、第20図、第23図）を欠く。鱗形屋本はHoMA本系統の本をもとに行や字を詰め、挿絵を略し、丁数を減らして出版した伝本と推測されよう。

HoMA本は、いわゆる江戸版の特徴（柏崎順子「松会三四郎 其二」『言語文化』45、2008年12月）を有し、挿絵の雰囲気は万治・寛文頃刊『はちかづき』等とも近い。この時期に出版されたとすれば、HoMA本が早期の『塵滴問答』の絵入り本である可能性も視野に入ってくる。加えて、松会と鱗形屋は一部の往来物を除いて出版対象を分け、重複を避けていたとされるが（先掲柏崎氏論文等）、『塵滴問答』は両書肆ともに出版した一例であり、本書が往来物に通ずる性格を帯びて享受されたことを窺わせる。

二、明暦四年版『塵滴問答』

陸続と書写出版された『塵滴問答』の諸本の多様さから考えれば、いまだ公式に報告されていない伝本が発見される可能性は十分考えられよう。次に紹介する明暦4年版『塵滴問答』も、従来知られていなかった一本である（科研費基盤C「中近世日本における画題享受史の構築」研究代表者：稿者により蒐集。国文研より画像公開予定）。中本1冊、縦19.1×横13.4cm。表紙は胡桃染色に麻の葉繋ぎ様の地文様に牡丹を散らす（型押し）。外題、双枠の題簽「ちんてき問答」。内題、「ちんてき問答」。版心、「ちんてき 一（～六、七ノ八、九～十一、十二之三、十四～十八、十九廿、廿一～廿三、廿四五、廿六～三十～三十二、卅三四、卅五終）」。計30丁。32丁と31丁は乱丁。匡郭は単辺、縦16.5×横12.3cm。版心に界線がないため、横寸法は中央折り目からの数値。本文は毎半葉11行。各話の一つ書で改行、和歌は一字下げ、一行書き。刊語「此ちんてき問答は世間多候へ共事之ノ外謬有之故今又改令開板者也」。刊記「明暦四年丙申三月中旬山田市良兵衛開板」。本文から判断して、本書は明暦2年版（東大総合図書館蔵）の刊記を改めた覆刻と思われる。なお、明暦4年の干支は「丙申」ではなく「戊戌」である。

三、『塵滴問答』の継受

見てきたとおり、『塵滴問答』が挿絵を伴うようになったのは寛文頃のことであった。次第に寸法も縮小化され、多くの読者を獲得してゆく。この時期は、あたかも奈良絵本の全盛期と重なっている。果たして、版本『塵滴問答』はその生成にも影響を与えていた。『酒呑童子』さながらの化生討伐譚を語る『岩竹』（江戸前期写、岩瀬文庫蔵）は、坂東八溝の在地伝承を換骨奪胎し、版本『塵滴問答』「のぼりはしの由来」を取り込んで制作された室町物語であった（拙稿「横行八足一岩嶽丸のこと」『国文学研究資料館紀要』文学研究篇36、2010年3月）。版本によって齎された共通の教養を援用することで、本話は在地伝承の地平を離れ、室町物語へ昇華したといってもよい。『塵滴問答』の諸本の発掘と相俟って、今後、さらに多様な文芸作品に『塵滴問答』撰取の痕跡が看取されるであろう。

実際、奥浄瑠璃にも『塵滴問答』との近似が認められる。即ち『小幸物語』は尺八の由来を説いて「抑、尺八と申ハ日本にてハ始らず、大唐の聖人こうしの作り、日本へ渡り、あまねく広まりなり、五ツの孔は春夏秋冬土用也、吹時はわうしき、こんしき、こつ本よりむじ物の心をあらわして妙法蓮花を写ける物也」という（『奥浄瑠璃集 翻刻と解題』1994年、和泉書院）。渡辺氏の寛永九年版『塵滴問答』翻刻により示すと、これは第41「尺八の由来」と大略一致する。また、「写本双六手引」に基づいて双六の由来を記す『双六考』（明治43年6月刊・西澤仙湖編）の一節も、『塵滴問答』第13「盤の上の遊び」と近い。

同様の例は地方芸能にも見出される。大村藩（現長崎県東彼杵郡）の民俗芸能、浮立の由来記「外山流一伝記」は、元奥書によれば万治3年（1660）、今春大夫正冬の手になっ

た（元奥書「此一卷書者当永風流副置者也、到澆季応外山流之印矣、厥々譲之乎／万治三年庚子九月」。『大村郷村記』3、1982年、国書刊行会所載）。そこに語られた笠の由来「笠者人王四十五世聖武天皇御宇、正暦三年田村將軍之内、笠重而言者工出矣、因骨数豎横不定也、亦須月之輪於日丸事者」は『塵滴問答』第49「笠の起源」「にんわう四十五たいのみかど、しやうむてんわうの御時、しやうれき三年に田むらの御うちかさしげといふ人のたくみたり（後略）」とよく合致する。その前後には『塵滴問答』第37「謡の起源」、第40「神楽の起源」と重なる記事があり、由来記の四分の一強が『塵滴問答』の言説と一致する。「外山流一伝記」が『塵滴問答』のどの伝本を参照したのか、あるいは両者に共通する源泉から言説を汲み上げたのかは後考を待ちたいが、重要なのは、こうした事物起源の書が新たな文芸の土壌となっていることであろう。

HoMA 本や明暦4年版『塵滴問答』の存在は、地道な諸本調査の必要性を示すものである。この豊かな水脈から、中近世日本における知の基盤がどのように生成され、継承されたのか、諸相のさらなる考究が必要であるし、『塵滴問答』そのものの成立事情の解明も急がれる。ホノルル美術館のレイン・コレクションは、その端緒を改めて開いてくれたと思う。末筆ながら、貴重な文献閲覧と図版掲載をご許可下さった同館の皆様、とりわけ、常に細やかなお心配りを賜ったショーン・アイクマン東洋美術部長と南清恵リサーチアシスタントに深謝申し上げる。

注 高橋秀城「智積院所蔵の国文学関連史料数点について」平成22年度科学研究費補助金・研究成果報告書『智積院聖教における典籍・文書の基礎的研究』



図:HoMA本『塵滴問答』TD2017-2-002。冒頭・第3図・刊記

一期一会

小林 一彦（国文学研究資料館地域資料専門部会委員、京都産業大学文化学部教授）

若い研究者に向けて文献調査の知見や経験をわかりやすく紹介してほしい、調査収集に関するエッセイをと依頼されました。適任の先生がたは大勢いらっしゃるはずですが、弱輩にして非才の身ながら引き受けてしまいました。

書誌学ブームのような昨今ですが、単行本や雑誌だけでなく、DVDやネット上にも関連する動画や画像がたくさんアップされており、昭和の時代とは隔世の感があります。書誌学用語や調査手法なども標準化が進んできました。

けれども、本は生き物で、個体差があり性格も違います。書誌学の著作や論文をよむことも大事ですが、百聞は一見に如かず。愚直に本と向き合い、本の声に耳を傾けることで、はじめて感得されることもたくさんあります。本のことは、本の身体を通じて、本に教えてもらうしかありません。

具体的な話をしましょう。卷子本の扱いは、複製資料で練習しておくことを勧めます。いざとなると面喰うものです。閲覧が終わったら、扱いに自信のある人でも、巻き直しは自分で行わず調査先の担当者にお任せしてください。同じ京都市内でも、お蔵や収蔵庫によって条件は大きく異なり、特に湿度は同じ敷地内でもお蔵ごとに違うようです。文庫によって、卷子の巻きがきつところと甘いところがあることも、訪書の経験を積むにつれて分かってきました。何百年もそこで生きてきた書物は、その保存状態で命を保ってきました。本は「息をして」生きています。

写本学の極意は、目の前にある写本を目にしなが、その向こうに親本の姿が透視できるようになることです。冷泉家時雨亭文庫の本は、転写本が数多く伝存しています。影印本を使って、親本（影印）とその転写本とを写真照合をするごとく見比べてみてください。時雨亭叢書を持参し、転写本を手元に、その向こうに親本（影印）を置き、縦に並べて書写面の見開きを比較しながら、一行一行、目で文字をたどりながらじっくり丁をめぐってみてください。きっと書写者の気持ちと同化できるはずですが、これを地道に続けていると、ある時期から展示ケースのガラス越しであっても、写本を目にしたときに、親本の姿がありありと浮かんで見えてくるようになります。ぜひ、若いみなさんに、やっていただきたい方法です。

ある時期の写本を根幹に蔵書形成された文庫で、集中して量を見ることも有効です。その時代の写本の特徴が掴めてきます。斯道文庫のマイクロ撮影のアルバイトで、平澤五郎先生の調査に何度か同行しましたが、一週間ほど写本

調査づけの生活は、本を学ぶ絶好の機会でした。書誌情報が書かれたターゲットを撮影、その後本を撮影しますが、表紙の形状、料紙の種類、書写年代を丁めくりのたびに身体に染み込ませました。連日昼は撮影、夜は酒宴でしたが、差し向かいで実にたくさんの方を教わりました。古い写本ほど本文の意味が通らないことが多い（後年、冷泉家時雨亭文庫の調査室で藤本孝一先生からまったく同じことをお聞きしました。たしかに先達の先生がたが執筆した解題中に「本文が乱れているゆえに、かえって古態をとどめているともいえる」等々の表現をたびたび目にします）。書写年代は誰かの調査結果を鵜呑みにせず自分で判定するように。公的機関の所蔵本は遠慮せずに書写年代を決めてよいが、個人で大切にされている本、神社寺院の社宝寺宝のような本を見せていただいた時には少し甘めにするのが礼儀だ。所蔵者が〇〇時代と言いつ張っているものについては「〇〇時代の書写と伝えられるが、あるいはいくぶん降るかもしれない」などと工夫して書くように、などです。亡くなられた先達の方々も、そうしてきたのでしょうか。同一人の鑑定でも所蔵先によって書写年代は微妙にゆらぐ可能性があることは、覚えておいてよいと思います。

調査員会議への初出席は、三十年ほど前になります。当時、私は中部地区の調査員で、初対面の木越治さん（我々の兄貴分でした）から北陸古典研究会にぜひ加入を、と声をかけてもらいました。地区の研究者の集まりに、調査員の連携が役立っていたことは間違いありません。複数人が連れだつての調査は楽しく、個人では、まず見ない資料も、悉皆調査では拝見でき、漢籍や版本などは扱いたない調査員の人に、教えてもらうことも多々ありました。出身大学も研究方法も専門分野も異なるメンバーが同宿する夜は、情報共有や意見交換の場としても貴重でした。小浜に調査にでかけた夜、国民宿舎の畳の部屋で山本一さんと中世歌論について朝5時頃まで語り合い、少しうとうとして調査収集（しっかり予定数のカードは取っています）に出かけたことなど、懐かしい思い出です。往時を感謝しつつ、時代の趨勢とはいえ、そうした自然発生的な教場が消えてしまう現状を見るにつけ、国文学研究はしだいに痩せていくのでは、と気がかりでもあります。

一期一会。人ばかりでなく、本との出会いも同じです。忘れがたい本たちとの出会い、また調査の失敗談などもお話ししたかったのですが、紙幅が尽きてしまいました。

第11回日本古典文学学術賞受賞者発表

「日本古典文学学術賞」は、財団法人日本古典文学会が主催していた「日本古典文学会賞」を継承し、若手日本古典文学研究者の奨励と援助を目的として、国文学研究資料館賛助会に設置されました。2018年で第11回を迎えます。

受賞対象者は、対象となる業績の公表時に40歳未満である研究者です（3名以内）。

今回は岐阜聖徳学園大学 大石真由香専任講師、県立広島大学 高松亮太専任講師、高麗大学民族文化研究院 裴寛紋研究教授の3名の方が受賞され、授賞式は10月19日（金）にパレスホテル立川（立川市曙町）で開催されました。

◆選考委員◆

中川 博夫（和歌文学会／鶴見大学教授）
 中嶋 隆（日本近世文学会／早稲田大学教授）
 山中 瑠子（中世文学会／法政大学能楽研究所長・教授）
 阿部 好臣（中古文学会／日本大学教授）
 田中 大士（上代文学会／日本女子大学教授）
 小林 健二（国文学研究資料館賛助会運営委員会委員長／同館副館長）
 入口 敦志（国文学研究資料館教授）



左から 小林委員、入口委員、阿部委員、田中委員、中川委員長、大石氏、高松氏、裴氏、キャンベル館長、谷川副館長

◆過去の受賞者◆

第1回 平成20年度 沖本 幸子／北村 昌幸
 第2回 平成21年度 岡崎 真紀子／恋田 知子
 第3回 平成22年度 久保木 秀夫／水谷 隆之
 第4回 平成23年度 金 時徳
 第5回 平成24年度 平野 多恵
 第6回 平成25年度 一戸 渉／光延 真哉
 第7回 平成26年度 木越 俊介
 第8回 平成27年度 合山 林太郎
 第9回 平成28年度 木下 華子／牧 藍子／小財 陽平
 第10回 平成29年度 高野 奈未／渡瀬 淳子

第11回日本古典文学学術賞選考講評

大石真由香氏 『近世初期『万葉集』の研究 北村季吟と藤原惺窩の受容と継承』

(和泉書院、2017年2月刊、A5判390頁、本体11,000円)

江戸期の万葉集研究は、契沖に始まるということが一般的な見方である。契沖の同時代に北村季吟の万葉集研究があるが、こちらは独創性がないとして、著しく軽視されてきた。また、江戸初期には、藤原惺窩による万葉集の書写が行われているが、書写の際、内容を大きく変改するということが災いして、こちらはほぼ無視されてきた。本書は、この季吟・惺窩という、従来等閑に付されてきた両者に着目することにより、江戸初期の万葉集研究に新たな展望をもたらしたものである。

第一部「北村季吟の『万葉集』研究」においては、季吟が、先達である仙覚の実証的な注釈態度を尊重しながらも、和歌集としての万葉集を注釈するという立場から、藤原定家の伝統的な歌学を尊重した方法をより重んじていたことを明らかにしている。契沖とは異なる、歌学の伝統を尊重する姿勢は、当時の万葉集のとらえ方としてはむしろ一般的で、この時代の万葉集の読み方をよく反映していることを指摘する。第二部「藤原惺窩と『万葉集』」では、惺窩校正本の詳細を検討し、惺窩の万葉集に対する態度を明らかにしている。なかでも、惺窩校正本の現存伝本である三本を詳細に比較して、これらが一つの原本から転写された兄弟関係ではなく、惺窩校正本の変改の過程を示すものであることを明らかにした点は重要である。また、惺窩の、万葉集の作品から仏教思想を排除しつつ読もうとする姿勢は、国学初発期の荷田春満にも通ずるものがある点も指摘している。本書は、季吟、惺窩の万葉集研究への従来までの低評価にとらわれず、それぞれの仕事に丁寧な寄り添い、注釈、伝本を一から読解することにより、新たな評価にたどり着いた研究と考えられる。ただ、一書の作りとして、全体の四割が翻刻で占められていることなど、論の厚みについての物足りなさも感じられる。しかし、季吟、惺窩という万葉集研究の空白地帯に対して、ひとり敢然と挑み続け、大きな成果を得た労苦は賞賛に値する。そのことを高く評価し、選考委員会は全員一致で、大石真由香氏を日本古典文学学術賞の受賞者に決定した。

また、氏は、本書の成果を引き継ぐ形で、中世の禁裏御本万葉集の解明に取り組んでいる。禁裏御本は、重要な伝本と目されながら、伝本が残らないことから、“幻の本”とされ、研究が進んでいなかった。氏は、この本について、陽明文庫などから新たな資料を発掘し、禁裏御本自体の姿を復元しようとするなど、めざましい成果を上げつつある。この成果が、氏の研究にさらなる進展をもたらすであろうことを一言付け加えておく。

(文責 田中 大士)

高松亮太氏 『秋成論攷 学問・文芸・交流』

(笠間書院、2017年2月刊、A5版368頁、本体8,500円)

本書は上田秋成の和学者・歌人としての文事を跡付け、その文壇的位置や史的位置を考証し、かつ周辺人物との交流の諸相を明らかにした。

第一部「秋成の和学活動」は三章から成る。第一章では、国文研蔵『秋成説書入「万葉集」』の書き入れ筆者が門人「林鮎主」であり、その聴聞時期は寛政十一年ごろかそれ以前であることを考証する。第二章では、源実朝と田安宗武を万葉調歌人として評価した秋成の両者をめぐる活動の「同時代のおよび史的意義」について整理するが、大通寺蔵『金槐和歌集抜萃』、蓬左文庫蔵『田安亜槐御歌』の奥書等を用いて説得力ある論旨を展開した。第三章では、小沢蘆庵門人達との交流を示す新資料「宇万伎三十年忌歌卷」を紹介し、新出自筆書簡を参看しながら万葉注釈書『金砂』が蘆庵社中を念頭において執筆されていることを指摘した。三章とも、新資料を用いた、秋成の万葉学にかかわる圧巻の内容。三章全体を詠むと、秋成の万葉学や注釈の生成、さらには知的ネットワークの諸相が具体的に見えてくる。

第二部「秋成の学問と文芸」は四章から構成される。第一章では 松永貞徳『載恩記』の影響を、秋成の師伝観や『雨月物語』『仏法僧』『浅茅が宿』の一文に見出している。第二章においては、自歌合『十五番歌合』が二系統に分類でき、一系統の成立に、天理本の判詞に名が載る羽倉信美の関与を指摘。別な一系統である『伝瑚璉尼本』の、

天理本とは異なる判詞から、その歌論的特質を考証した。第三章では、『春雨物語』「目ひとつの神」には、真淵から踏襲した和歌史観が投影する点を指摘し、第四章では、「目ひとつの神」に『蒙求』の「張翰適意」の故事が引用されていることに着目、さらに「帰郷」という行為が「命禄」（時運認識）と結びつけられて、モチーフとなっていると述べる。特に、沖森蔵『伝珊瑚尼本』を用いた『十五番歌合』の考証（第二章）に説得力があった。

第三部「秋成の和学とその周辺」は四章から成る。第一章は、門人山地介寿について、宣長・秋成等の多彩な交流について考証。第二章では、荒木田久老の上洛中の諸活動を跡付け、門人たちとの交流について考証する。第三章では林鮎主の活動を詳細に跡付け、第四章にその年譜を載せる。第三部は、従来、等閑視されてきた秋成周辺の人々の手間暇かかる調査を地道にこなされた点が高く評価された。

以上の点から、本書は選考委員会で高い評価を得、全員一致で高松亮太氏を日本古典文学学術賞の受賞者に決定した。（文責 中嶋 隆）

斐寛紋氏 『宣長はどのような日本を想像したか—『古事記伝』の「皇国」』

（笠間書院、2017年6月刊、A5判257頁、本体5,500円）

『古事記伝』で本居宣長が達成しようとしたことの一部を、外国との関係を軸にすえて明らかにする、というのが本書の特徴であり、そのことは大きな成果を挙げている。

第一章において、『古事記』の記述が外国への視点をほとんど持たないことに対し、『古事記伝』では、日本の優位を説明するために外国という視点を導入するという宣長の方法を鮮やかに提示する。特に第二節で詳述されるように、『古事記』の時代には考えも及ばなかったような西洋世界を含めた地球規模での宣長の思考は、「〈古事記〉をさらに現実に合致する世界の物語として再構築」しているとする。第一章の「『古事記伝』のつくった「外国」」というタイトルが示すとおり、「常世国」という一語の解釈から「かなり強引に」「外国」という視点を作り出したとも言う。ここにみられる『古事記伝』観は、これまでの一般的な『古事記伝』観、例えば「空理に走らず文献の文字を重んじて常に帰納的に研究を進め、奇矯な推理に走るものがなかった」（大野晋『国史大辞典』「古事記伝」の項目）のような見方とは大いに異なっていることは特筆すべきであろう。著者はここに宣長の注釈の真意を見ており、その論証は説得力を持っている。

では、その「外国」とは具体的に何を示しているのか、ということ第二章で論じる。それは、単なる注釈的な事項としての外国ではなく、「皇国」に対峙するものとしての「外国」を求めることになる。同じ「カラ国」である「韓国」や「漢国」の解釈を通して、宣長の強い対外認識の中心にあったのは「漢国」であることを明らかにし、そこへの強烈な対抗意識を明示してみせるのである。

「漢国」に対置される「皇国」の問題は、第三章で論じられる。第一節では、「文字」と「言伝」、「空理」と「妙理」、「君臣の道」と「君臣の分」といった対置される概念を丁寧に掘り起こしながら、「皇国」の優位を主張するにいたる宣長の思考過程を追う。次の第二節で、『古事記』は宣長によって方法的に選ばれたものであって、『古事記伝』について言う「皇国の物語」は『古事記』原典とは別のものであるとする。「御国」から「皇国」への転換を周辺資料を交えながら細かく追求し、皇統の正当性を明確にするための物語として、宣長が『古事記』を読もうとしたことを明らかにする。この点も、説得力のある論証となっている。

終章では、宣長以後の「皇国」の行方について追及がなされる。「皇国」を「ミクニ」と読むのではなく「クワウコク」と読むようになることを指摘し、宣長の意図とは異なる「近代的な国家論に組み込まれ」て行くことの象徴としてみていることは大きな示唆を与えるものだろう。

ただ、宣長同時代の世界認識については、ひととおりの説明は付いているが、更に踏み込んで、同時代の海外観や対外的な社会状況を含めながら考察すれば、より深い宣長理解が可能であるように思われる。この点は今後の課題となるだろう。著者の言う「宣長問題」という問題の措定も、上記のような考察を含めばより深まるのではないだろうか。

上記のような観点から、専攻委員会は斐寛紋氏の著書を古典文学学術賞にふさわしいものとして高く評価した。（文責 入口 敦志）

中世日本の写本文化をめぐる研究集会

ハンブルク大学写本文化研究所 (The Centre for the Study of Manuscript Cultures (CSMC), <https://www.manuscript-cultures.uni-hamburg.de>) において8月21日(火)～22日(水)の2日間、同研究所のヨルク・クヴェンツァー (Jörg Quenzer) 教授、シュテファン・デル (Steffen Döll) 教授の主導により、Varieties and Patterns of Manuscripts in Medieval Japan と題した国際会議が開催されました。CSMCでは、書誌学、歴史学、宗教学、文学といった伝統的手法に分析科学、保存科学といった工学的な方法を併せて写本文化の解明が進められています。アジア・アフリカ地域の写本文化を対象とした共同研究も進められており、本シンポジウムもそうした活動の一環として名古屋大学との連携のもとで開催されました。当日は欧州からのみならず、G. キーワース氏(サスカッチアン大学)、B. ロウ氏(ヴァンダービルト大学)といった北米の研究者も参加して、經典・唱導書・講式・諷誦文・次第・楽書等々の中世日本の宗教テキストを中心とした写本文化の諸相についての研究報告と討議が行われました。日本からは阿部泰郎(名古屋大学)、近本謙介(同)、高橋悠介(慶應義塾大学附属研究所斯道文庫)、荒木浩(国際日本文化研究センター)、中原香苗(神戸学院大学)の諸氏と海野が参加しました。今後、国文研とも連携が進むことを期待しています。



(海野 圭介)

肥前島原松平文庫における合同古典籍研修会

平成30年8月30日(木)、肥前島原松平文庫(長崎県島原市、島原図書館)において、熊本県立大学と福岡女子大学との合同古典籍研修会が開かれました。松平文庫には、貴重な日本の古典籍が数多く所蔵されています。その古典籍を実地に調査し、成果を報告する目的で、熊本県立大学の米谷隆史氏を中心に企画されたものです。

国文学研究資料館でも長年にわたって調査とマイクロ画像の収集を行ってきましたので、この催しを後援し、当館の入口がなぜ古典籍そのものに触れることが重要であるかという話をしました。安武佑梨氏と今井明氏は、ともに松平文庫蔵本の研究上の重要性についての発表を、鈴木元氏は、文庫所蔵の資料を用いて、連歌懐紙の様式についての概説を行いました。その後は、報告で採りあげられた古典籍の原本を実際に展示していただき、資料を囲んでのレクチャーとなりました。院生のほか、松平文庫の関係者など30数名の参加を得て、大変充実したプログラムであったと思います。

前日には、古典籍の書誌を採る合同調査を行いました。また、研修会当日の午前中には、松平家の菩提寺である瑞雲山本光寺の常盤歴史資料館の見学も行い、松平文庫の沿革を肌で感じる研修会となりました。

(入口 敦志)

【標題】 熊本県立大学・福岡女子大学 合同古典籍研修会

後援・国文学研究資料館

【日時】 平成30年8月30日(木) 14:00 - 16:20

【会場】 肥前島原松平文庫

【プログラム】

1. 古典籍のかたち 入口敦志(国文学研究資料館・教授)
2. 松平文庫本『夜寝覚』 安武佑梨(熊本県立大学・大学院生)
3. 連歌と連歌懐紙 鈴木元(熊本県立大学・教授)
4. 松平文庫と中世和歌 今井明(福岡女子大学・教授)
5. 質疑・原本閲覧



日本古典籍セミナー University of California, Berkeley 2018

2018年9月6日(木)、UCB(カリフォルニア大学バークレー校)C.V.スター東アジア図書館にて、同図書館、UCB日本学研究所、国文学研究資料館の共催による日本古典籍セミナーが行われました。同図書館では、2016、2017年と継続的にセミナー(ワークショップ)が行われ、今回で3回目の開催となりました。また今回は、AJLS(Association of Japanese Literary Studies、アメリカ日本学会)の第27回年次大会の関連行事でもありました。C.V.スター東アジア図書館でのセミナーの後には、会場を移してロバート キャンベル当館館長による公開講演が行われました。当日の概要は下記の通りです。

【セミナー参加人数】32名(当日配布の名簿による)

【プログラム】(敬称略)

1:00 p.m. - 1:10 p.m. 開会挨拶 ピーター・ズー(C.V.スター東アジア図書館長)

ロバート キャンベル(国文学研究資料館長)

1:10 p.m. - 2:10 p.m. | Part A: 仏書について On Buddhist Texts

「日本の仏書の書誌学:UCB東アジア図書館賀蔭(Ho-Chiang)コレクション本を用いて」

落合博志(国文学研究資料館教授)

「江戸期における近代化としての宗派別仏教聖典作成」

マーク・ブラム(カリフォルニア大学バークレー校教授)

2:10 p.m. - 3:10 p.m. | Part B: 写本について On Manuscripts

「奈良絵本について:UCB東アジア図書館三井文庫蔵『文正草子』を例として」

恋田知子(国文学研究資料館准教授)

「写本の生成:添削、編集、モノとしての三条西家詠草」

海野圭介(国文学研究資料館准教授)

3:20 p.m. - 4:20 p.m. | Part C: 刊本について On Printed Books

「刊本を筆写した写本について:UCB東アジア図書館三井文庫蔵本を用いて」

入口敦志(国文学研究資料館教授)

「〈刊本の書誌学〉刊記と刊・印・修:UCB東アジア図書館三井文庫蔵『百人一首像讚抄』を例として」

神作研一(国文学研究資料館教授)

4:20 p.m. - 4:30 p.m. | Special Introduction

「〈ないじえる芸術共創ラボ〉の紹介」

小林健二(国文学研究資料館副館長)

5:00 p.m. - 7:00 p.m. | Keynote Address (Morrison Library)

「Tales of Transmission in Nineteenth Century Japanese Literature and Visual Art」

ロバート キャンベル(国文学研究資料館長)

今回のセミナーには、C.V.スター東アジア図書館と、同じくUCBのチャン・リン・ティエン東アジア研究センターの10周年記念の意義もありました。当日の発表で用いられたスライドのPDFは、<http://guides.lib.berkeley.edu/KotensekiSeminar2018/>で参照可能で、将来的には当館HPにも掲載予定です。今回のセミナーを含め、継続的に行っているC.V.スター東アジア図書館蔵三井文庫旧蔵写本の調査の折など、UCBではいつもマルラ俊江司書より格別のご協力を賜っています。記して御礼申し上げます。

(柳瀬 千穂)



公開研究会「古典籍画像に対する文字認識と内容解析への取り組み」

平成30年10月9日(火)国文学研究資料館において、公開研究会「古典籍画像に対する文字認識と内容解析への取り組み」を開催しました。画像処理・アルゴリズムを専門とする公立はこだて未来大学准教授寺沢憲吾氏を講師に迎え、機械による文字認識の現状について、ディープラーニングとの関係から分かりやすく解説していただきました。

機械による文字認識の精度は、ディープラーニングの発展により日増しに向上しており、現時点での到達精度は、日本古典籍字形データベースでは、ひらがな97.2%、上位10字種で94.2%、全字種で55.4～88.4%です。古典籍の文字認識の難しさは文字の種類が多く、字形の揺らぎが大きいことにあります。このため、切り出してから認識するという伝統的なアプローチだけではなく、文字を認識しながら切り出しを行うアプローチも進展しています。さらに、「文脈を理解しながら文字認識と文字切り出しを同時に行う」という試みも始まっています。いっぽう、文脈による補正はやりすぎてしまうと重要な情報を損なう可能性もあるので、文字認識に辞書や文法の知識を取り入れる工夫もなされています。さらなる向上のためには「大量の画像データ」・「大量のテキストデータ」が必要ですが、それだけではなく、「大量のデータがなくてもなんとかなる」ための研究も重要であることが指摘されました。

当日は参加者からも積極的に意見が出され有意義な議論がなされました。本研究会は日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画の事業として行われました。(岩橋 清美)



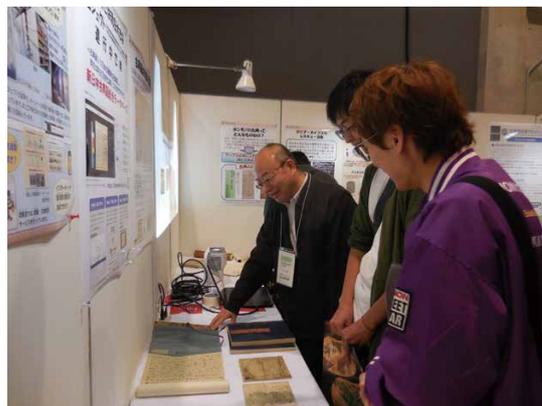
大学共同利用機関シンポジウム 2018

10月14日、名古屋市科学館において、大学共同利用機関シンポジウム2018が開催されました。この催しは、4つある大学共同利用機関法人に属する研究機関が、ブースを出すとともに研究者トークを行って最先端の研究を一般の方々にわかりやすく紹介しようというものです。

国文研では、様々な活動を紹介するためのポスターを掲示するとともに、古典籍のレプリカを展示し、来訪された方々に実際に手にとってご覧頂けるようにしました。レプリカではありますが、普段手にとることのない卷子や列帖装などの古典籍のかたちに大変興味を示していただきました。また、研究者トークでも「和書のさまざま」と題し、『枕草子』『方丈記』などの古写本を例にとりながら、古典籍のかたちや表記の意味について入口が解説を行いました。

レプリカについては、富士ゼロックス京都の吉田謙一さんにご協力いただき、絵巻物やカルタなどを数多く展示することが出来ました。紙質や印刷にこだわって大変精巧にできており、手触りやめくる感覚なども本物とみまごうばかりのもので、こちら大変好評を博しました。記して深謝申し上げます。

(入口 敦志)



「福島県浜通りの歴史と文化の継承—『大字誌ふるさと請戸』という方法—」

10月13日（土）、人間文化研究機構広領域型基幹研究プロジェクト国文学研究資料館ユニット「人命環境アーカイブズの過去・現在・未来に関する双方向的研究」シンポジウム「福島県浜通りの歴史と文化の継承—『大字誌ふるさと請戸』という方法—」が、せんだいメディアテーク（宮城県仙台市青葉区春日町2-1）において開催されました。

このシンポジウム開催のきっかけは、2018年5月『大字誌ふるさと請戸』（蕃山房）が刊行されたことにあります。この書は、東日本大震災と福島県第一原子力発電事故によって故郷を奪われてしまった福島県双葉郡浪江町請戸地区の人々が、請戸の歴史を後世に残すために刊行されたものです。その成果を踏まえて、今回のシンポジウムでは、『大字誌ふるさと請戸』歴史編執筆者5名が請戸の歴史を報告しました。報告題名および報告者は以下の通りです。



- | | | | |
|------|--------|-------------------|----------|
| 第1報告 | 松下 正和 | （神戸大学地域連携室特命准教授） | 「古代の請戸」 |
| 第2報告 | 泉田 邦彦 | （石巻市教育委員会生涯学習課主事） | 「中世の請戸」 |
| 第3報告 | 天野 真志 | （国立歴史民俗博物館特任准教授） | 「近世の請戸」 |
| 第4報告 | 井上 拓巳 | （さいたま市立博物館学芸員） | 「近世の請戸湊」 |
| 第5報告 | 西村 慎太郎 | （国文学研究資料館准教授） | 「近現代の請戸」 |

松下氏の報告は、考古学と文献史学の成果を援用して旧石器時代から平安時代までの請戸の歴史を述べたものです。報告で印象的なのは、報告の「おわりに」で大字誌における請戸の皆さんによる視点や請戸の皆さんによる大字誌づくりの意義を強調していた点です。泉田氏の報告は、請戸を拠点とした大平山城主標葉氏の歴史を知ることを通じて、請戸周辺の中世社会を描こうとしたものです。泉田氏は、請戸地区の南側に位置する双葉町大字両竹出身で、ほぼ地元住民ともいえる立場であり、地元住民が「地域の記憶」を後世に引き継ごうとする意味を考えさせられます。天野氏の報告は、近世の請戸を相馬中村藩領の請戸として捉えて概略したものです。近世の請戸は、在郷給人の存在が大きな意味を持っていたと理解しました。井上氏の報告は、近世において栄えた東廻り航路における請戸湊について歴史的に位置づけたものです。請戸地区は、地区の東側が太平洋に面する港町であり、請戸湊が同地区において重要な存在であったことを窺わせます。西村氏の報告は、近現代の請戸について、多彩な請戸の歴史のなかでも近現代の漁業・レジャーに焦点を絞って紹介したものです。「地域の記憶」を後世に引き継ごうとする時、西村氏が「おわりに」で語った請戸の人びとが記憶にある歴史（身近な歴史・知っている歴史）を記録しておく必要性に共感しました。

本シンポジウムは、143名の方々にご参加していただき、前面ガラス張りで壁のないゆったりとした空間に身を置きリラックスした中で、活発な質疑が飛び交いました。水害・地震が多発している日本で地域資料が失われつつある現状を反映してか、専門の研究者から参加も多い一方で、請戸地区の地元住民を中心に地域住民からも多くの質問を頂き、実りの多いものとなりました。

個人的に印象深いのは、西村氏の報告で述べられた、東日本大震災直前であった、2010年8月請戸潮干狩りや同年7月170キログラムに及ぶ海水浴客のゴミ回収に関する8年前の歴史が地元において既に忘れられつつあることです。おそらく、災害が発生すれば、このような事態は、日本においてどこにでも起こりうると思われる。このような事態が、歴史資料の重要性を認識し、地域の人々の長年の経験と知識を記録していくことで、解消されるのではないかと認識しました。アーカイブズ学や歴史学を学ぶものとしてこのような現状に対して何ができるのか改めて考えさせられたシンポジウムでした。

なお、関心のある方は、『大字誌ふるさと請戸』（蕃山房、2018年5月）、泉田邦彦「『地域の記憶』を記録する」（西村慎太郎編『新しい地域文化の可能性を求めて vol.5 地域歴史資料救出の先へ』人間文化研究機構国文学研究資料館、2018年3月）をぜひとも参照してください。（荒木 仁朗）

平成30年度「古典の日」講演会

平成30年11月3日(土・祝)、東京都千代田区のイノホールにて、国文学研究資料館主催の「古典の日」講演会が行われました。「古典の日」は、日本を代表する古典作品である『源氏物語』の成立が『紫式部日記』寛弘5年(1008)11月1日に確認できるため、平成24年に11月1日に定められたものです。当館では古典に親しむという趣旨に賛同し、「古典の日」近接の休日に記念の講演会を開催しています。今年度は小林健二氏(当館副館長)と山本淳子氏(京都学園大学人文学部教授)を講師にお迎えし、約400名のご来場者とともに貴重なお話をうかがいました。

ロバート キャンベル館長の挨拶に始まり、小林氏より、特別展示「祈りと救いの中世」にちなみ、「源氏供養と石山寺」という題でお話がありました。『源氏物語』で男女の恋愛を描いたため、地獄に堕ちたとされる紫式部。中世には式部と読者を救済するための宗教儀礼「源氏供養」が行われ、そこで唱えられる「源氏物語表白」は物語や能へと波及しました。小林氏は能《源氏供養》の、紫式部が石山寺の観音であるという言説に注目し、崇拜対象とされる石山寺蔵「紫式部聖像」を凸版印刷による高精細画像で説明しながら、能の成立背景について語っていただきました。

次いで山本氏より、「藤原道長「望月の歌」詠歌から千年 和歌に詠まれた真の意味」という題でご講演いただきました。日本史の授業でお馴染みの、「この世をば我が世とぞ思ふ 望月の 欠けたる事も無しと思へば」。今から約千年前、藤原道長が皇后に立った娘の宴席で読んだ和歌です。山本氏は、従来、道長の万能感を著すと考えられていたこの歌を、后達の隠喩「月」や、「月」「盃」の掛詞など、和歌文学の視点から明解に説明され、最後に現代の典型であった傲慢な道長像を根底から覆すような、説得力のある新釈を示されました。宮中の複雑な人間関係も平易にご解説くださり、まさしく古典に親しめる場を創出していただきました。講師のお二人の最新のご研究に魅了されながら、今年度も盛況のうちに閉会しました。

来年度は、11月2日(土)に開催予定です。今後もより多くの方々へ古典の世界を知る喜びを感じていただきたいと願っています。

(糸 汐里)



第42回 国際日本文学研究集会

2018年11月17日(土)・18日(日)に開催された第42回国際日本文学研究集会は、研究発表7本、ショートセッション5本、ポスターセッション6本による発表、そして「いくさの表象」をテーマとしたシンポジウムという構成で行われました。国内外問わず多くの人が二日間の集會に参加し、また7本の研究発表は全て海外出身の参加者によるもので、40年以上続くこの集會の存在が国外にも広く浸透していることを感じさせるとともに、その上でどのように学術交流を図っていくことが必要なのかということも考えさせるものでした。

研究発表・ショートセッションは、対象作品における変化の問題を詳しく検証するものが多かったかと思えます。研究発表に関して言えば、陳華榮氏・FITHYANI ANWAR氏・FITTLER Áron氏・李曉源氏は、日本文学が〈異国〉と接触したときにどのように変化するかという問題を扱っており、MAUFROID Yannick氏・CITKO Malgorzata Karolina氏・梁蘊嫻氏は対象作品が生成過程や成立以降の時代の中でどう変わるのかという問題に向き合ったものと考えられます。ショートセッション最後のGERLINE Edoardo氏の発表は「遺産としての文学」の在り方を問題提起するもので、作者の手を離れて変容する古典文学の特質も改めて認識させるものでした。またポスター発表では、限られたスペースや時間の中で自身の研究をどう分かりやすく伝えるか、国際的・学際的な会が広がる中、より求められる能力となっていくであろうことを感じさせました。

シンポジウムは、専門とする時代や領域を異とする研究者同士が討議を行うことで、多角的な視野から「いくさの表象」を考えることを狙いとしていました。中川成美氏は、戦争文学とは何かという定義の問題やその複雑さ、そして戦争を文学に表象する意義を、徳田秋声の小説に始まりシミュニクの著書まで幅広い作品を取り上げながら具体的に示されていました。質疑の際にも言及があったように、「文学の力」「文学の使命」といった言葉が氏の発表中に繰り返されていたことは印象的です。金容澈氏の発表は、日本における〈元寇図〉の描出の問題を取り上げ、『蒙古襲来絵詞』が近代美術においても活用され、〈元寇図〉としてのイメージ固定へ影響を与えている様相を詳細に検証するものでした。〈元寇図〉を描き、発信する行為は、近代の時勢とも関係し、美術・文学・社会といった分野を横断する問題であることをも示されていました。最後に大津雄一氏は、『平家物語』になぜ血などの記述が多くは見られないのか、諸本も視野に入れつつ特に覚一本と呼ばれるテキストを対象に、複数の文学理論や叙事詩をも用いて分析されました。それは氏が、従来の古典文学の研究手法とその問題をも熟知した上で、発展的な視野のもとに行う論だからこそ説得力が生まれ、古典文学を専門とする若手研究者がこれからどのようにそれぞれの視野を広げていくのか、そうしたものが自ずと問われていたようにも感じます。

なぜ今この「いくさの表象」という問題に向き合うべきなのか、司会の櫻井陽子氏は時勢の不安定さに触れつつ「このような時代であるからこそ」と話されていました。そうした意図を伺うと、かつての戦時体制下における個々の責任の話がディスカッションの中で触れられていたことも当然かと思えます。体制に従順である余り、自身の行いや発信するものに無自覚になってしまえば過去は簡単に繰り返されてしまい、そうした忠告も本シンポジウムは示していたのではないのでしょうか。そしてその問題は、戦争という一側面に限った話ではないと考えられます。

開会の挨拶でロバート キャンベル館長は、国際日本文学研究集会の必要性とともに、こうした国際的な営みは、個人のみならず各機関の緊密な連携なくしては成り立たないという話をされていました。すなわち、多くの大学で国際化が謳われ、文科省のもとSGUの取り組みが推進されている近年、何を以て国際的なのか、広がる国際化に対してこれまでの研究やこれからの研究はどうあるべきか、情勢に流されるのではなく、そうした一つ一つに自覚的に向き合う姿勢が求められていると考えられますが、それは研究者は勿論のこと、各大学や機関、こうした会に関わる全ての人の自覚的な協力がなくては進展し得ないものと思われます。そして先駆的にこうした集會を催してきた国文学研究資料館であるからこそ、表層的ではない模索が今後も続けられていくのではないかと、会に参加して改めて思いました次第です。

(国文学研究資料館日本文学若手研究者会議委員・
機関研究員 滝澤 みか)



総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況

○「日本を研究対象とする学生のための英語講習会」を開催

日本文学研究専攻では、英語を母語としない日本を研究対象とする文化科学研究科の学生向けに「日本を研究対象とする学生のための英語講習会」を開催しています。当講習会は、総合研究大学院大学の平成30年度「アカデミック・コミュニケーション教育」事業の一環として企画され、日頃英語から離れている学生に感覚を取り戻してもらい、論文要旨作成やプレゼンテーションに役立ててもらおうのが狙いです。

講師は、自身も日本文学研究者としてのキャリアがあり、通訳・翻訳者などとして活躍するファリア・アンナマリエ氏。第1期(9月)ではアカデミック・ライティングの基礎を学びました。第2期は2月5日・12日・19日に開催を予定しており、英文講読のほか、報告原稿作成、プレゼンテーション実践などを通して、研究発表等に役立つ英語を学習する予定です。



○中間報告論文研究発表会の開催

毎年度開催している中間報告論文研究発表会を11月20日(火)に開催しました。今年度は在学生2名と研究生1名が発表を行いました。



花上 和広氏
「源頼房の和歌について」



陳 坤氏
「啓蒙教育についての和漢比較研究
—明代の『社学』と江戸期の
『郷学』を例として」



古明地 樹氏
「橘守国の絵手本作品における
和漢分類意識—レイアウトを起点に一」

○総研大文化フォーラム2018の開催

毎年度、文化科学研究科主催で開催されている総研大文化フォーラムが、11月23日(金)・24日(土)の2日間にわたり、地域文化学専攻・比較文化学専攻の基盤機関である国立民族学博物館(大阪府吹田市)で開催されました。

今年度のテーマ「知をわかち、ひとをつなぐ—研究成果の共有と還元」に合わせたシンポジウム「ひろがる知、つながるひとの輪」には当専攻の青木睦准教授が登壇し、被災地で泥にまみれるなどの被害にあった公文書のレスキュー活動について報告しました。展示場ツアーなど、国立民族学博物館が行っている研究の成果を活かした企画も実施されました。

当専攻からの発表者は以下のとおりです。

<ポスター発表>

相田 満(准教授)「日本に渡った楊貴妃のこゝろ—遺物と遺跡と伝説」



2月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28		

3月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24 31	25	26	27	28	29	30

4月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

- 開館：9：30～18：00 ● 請求受付：9：30～12：00, 13：00～17：00 ● 複写受付：9：30～16：00
- ただし、土曜開館日は、
- 開館：9：30～17：00 ● 請求受付：9：30～12：00, 13：00～16：00 ● 複写受付：9：30～16：00

展示スケジュール (2月～4月)

通常展示「和書のさまざま」
 会期 2019年1月15日(火)～9月14日(土)
 ※休室日
 日曜・祝日、展示室整備日
 ◆詳細は当館 WEB ページをご確認ください。

大学支援「国文研でゼミを」 大学教員の皆様へ

国文学研究資料館のゼミ室で、豊富な所蔵資料を利用しながらゼミや講義を行うことができます。
 ※学部・大学院で行っている日本文学や日本史の授業が対象となります。
 ◆詳細は当館 WEB ページをご確認ください。

表紙絵資料紹介

『かみよ物語絵巻貼付屏風』六曲一隻 (152.0×332.0cm)

『かみよ物語』絵巻の後半を裁断して屏風に貼り付けたもので、一扇に二紙ずつ全部で十二紙が貼られる。内訳は挿絵が六枚で詞章部分が六枚であり、各紙の縦の寸法は34.5cmで大型の絵巻であったことが知られる。一紙の幅は22.7から37.6cmと一定ではない。近年、国文学研究資料館に収蔵された。

『かみよ物語』は、『日本書紀』に語られる海幸山幸神話を物語草子にしたもので、彦火々出見尊の龍宮訪問譚と豊玉姫との神婚譚、干珠満珠による火閼降命の懲らしめと位譲り、そして鵜戸の産屋において豊玉姫が鵜羽葺不合尊を出産するまでの神話を物語絵にしたもの。表紙に掲載した図は、彦火々出見尊が龍王から譲られた干珠と満珠で兄の火閼降命を懲らしめる場面である。

伝本としては、室町後期の書写と推定される岩瀬文庫本をはじめに七本が確認できるが、これらは絵巻の形態で伝わっており、ほぼ江戸初期までの書写と見られる。諸本の本文は二つの系統に分かれるが、それほど大きな異同箇所はなく、挿絵においても異なった図柄が入り込むことはない。

本屏風に貼られた絵巻は、残された詞書から岩瀬文庫本の系統に属し、画風からは個人蔵の一本に近い。製作された時期は江戸初期頃と思われる。ともあれ、新しい『かみよ物語』絵巻の出現であり、この物語絵が江戸初期に複数作られており、流布していたことがうかがえよう。
 (小林 健二)

